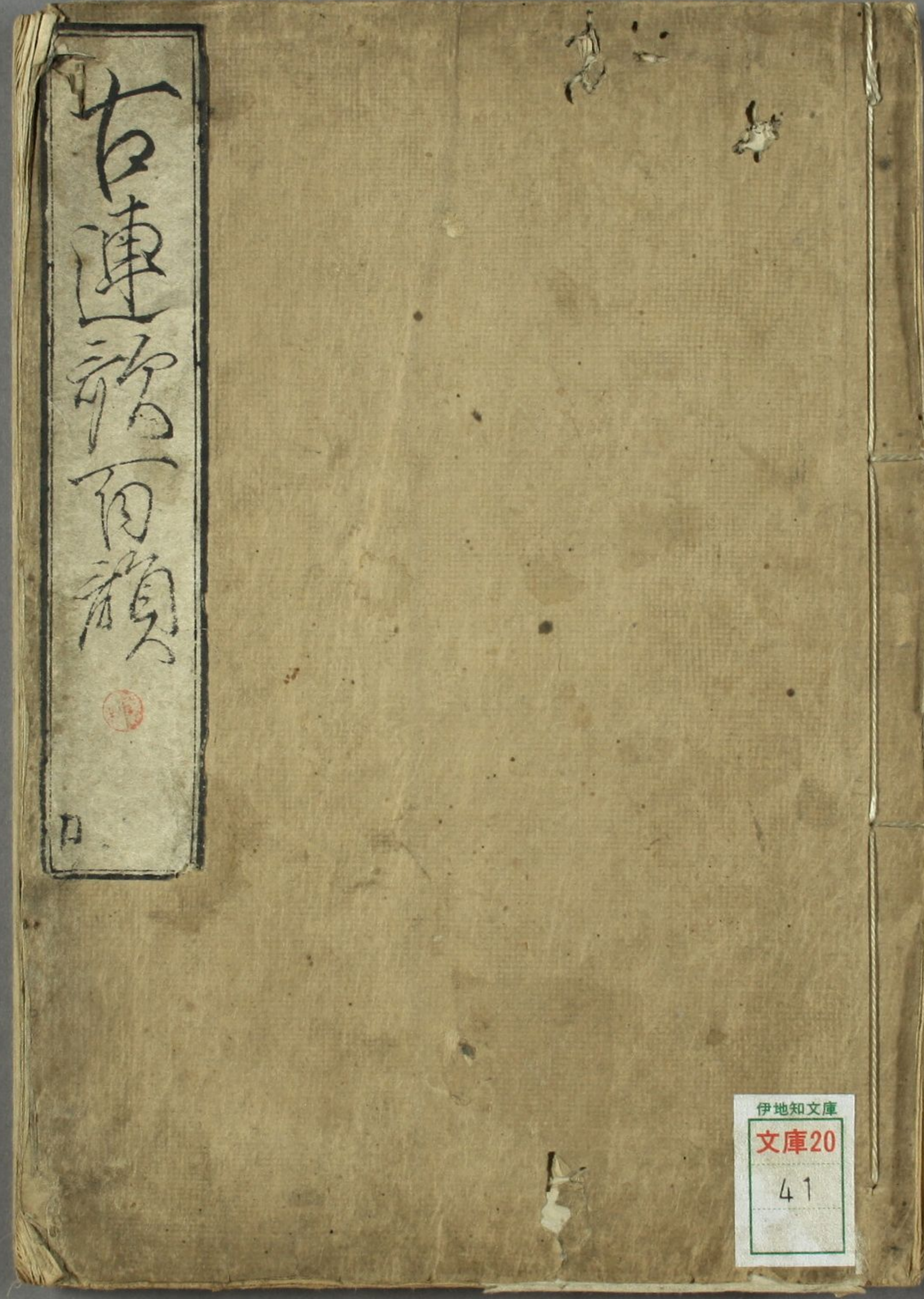




古連歌百韻



口

伊地知文庫

文庫20

41

古連歌百韻 一厚 永保元年

何人

伊地知氏書冊



西三茶松名院

茶倉

金

云後

宗出ら

紹巴

一子丸

茶倉

人全

出

予わきき
そつ神
希
輝
ま
中
な
秋
夕

捨ヤ 入 入 入 入 入 入 入 入 入 入
 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中
 阿 阿 阿 阿 阿 阿 阿 阿 阿 阿
 陀 陀 陀 陀 陀 陀 陀 陀 陀 陀
 仏 仏 仏 仏 仏 仏 仏 仏 仏 仏

御制良 後柏原
 入道前右大臣 公條

お瀬川品字あつぱうさうさう

永祿十二年二月五日

何江

宇野
 中ね

なりやよむまのまゝ
 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉 玉
 ま ま ま ま ま ま ま ま ま ま
 起 起 起 起 起 起 起 起 起 起
 中 中 中 中 中 中 中 中 中 中
 神 神 神 神 神 神 神 神 神 神
 只 只 只 只 只 只 只 只 只 只
 り り り り り り り り り り

夏いづと磯のし波岸れね
 江いそよるうらゝの月
 漕舟の棹うらゝの月
 旅よわらわの袖うらゝの月
 昌休

近江大岡

近世大圖

何人

月交り
後にはち
新のみ
通記
三好修徳全
山

寸竹
 直理
 文倫
 世英
 山陰
 倫奇
 艾園

竹 葉 山 中 無 事 閑 居

まゝもろめろき
ねのうけもある
りー佛とありし
つゝあてはるむ

秋の月
 いろもつらねとくのみ
 川もそよをけおき
 まふしもあなほさ
 まつたもちまふまのさる網
 りのさる山にひい
 吹雪のうしろさ
 おもひの御のめり
 流る水はひきはさくまき今
 まきのうの
 川のさる

付墨女一旬

十一卷
独吟
花
亦同
了
勾
解
切
老
作
云
机
升
台
量
か
ら
世
し
初
斗
ふ
も
来
あ
く
一
い
又
西
白
力
ふ
う
旅
過
さ
る
一
批
判
中
に
三
つ
の
家
職
と
い
ふ
こ
と
が
あ
る
が
こ
れ
は
た
だ
し
の
人
の
あ
ま
り
な
い
文
字
で
書
き
加
へ
て
お
け
る
や

三晦

包

古屋代は賢太人しあふふふふ

文代二十九十一

章甫

夏想之連歌

世々川に流るる初まふ
松とくくに住すの神
常ぬ梅の枝く咲くい
朝々くすくすくすく
長つふく目新くすく
月ハ葉つきの軒の音竹
笑うく神くくく秋く風
か曲のきくすくく
くくの本末く色く
くくくくくくく

大同

照言院准后

昌叱

日野大納言

鳥丸大納言

廣橋大納言

友家

雅枝朝臣

兵部佐
德善院
景敏
重然
前在大臣
大岡
准后
昌比
日大
鳥大
廣太
為宰
種枝

長門 徳島 大岡 照高 昌比 日大 友宰 廣太 烏太 大岡

月もや 杉の木は 明りて
 高より 雲の 影を 照らす
 通し 流る 水の 末に 止る
 水も 石も 砂も 月も 風も 雲も
 物も 人の 世の 常は 無常
 火の けや 火の 煙は 煙
 夕も 朝の 霞は 霞
 花も 葉の 影は 影
 鳥も 木の 葉は 葉
 虫も 草の 花は 花
 人も 世の 常は 常
 友も 友の 別は 別
 愛も 愛の 別は 別

五

六
七 六 七

一六

豊后大岡世多の二つは、和奇一音うゝ、代連舞に於て
 用ひてゐる。此處は其の載り、細川金吾に於
 ける五兒、ちよとの片の年仲や、及びそのりゝ
 といふ。これら金吾と感ずる。年頃を
 世と云ふ。人々も、おとこの心、たゞの仲、
 世と云ふ。夜泊と云ふ。中のみ、男、世と云
 用連舞、ちよと云ふ。年上、おとこの心、
 田辺に於て、山、おとこの心、おとこの心、
 と云ふ。

文化十年仲冬之月

丁巳年十月廿二日於大覺寺後

何陋

通の國々をゆるみ葉は
軒窓の松乃て空をよみ
秋の風月ありとけしきく
はれりる波の何方
一村のなや田うらん
うらましの跡もなき
先主とてさうなる
そふゆよりやうゆ袖
鐘のこもともせしむ
あはれのうたはの

詠已
秋
白
昌吐
雅敷朝臣
心前
慶典
俊孝
魚如
詠已

はるあけなをそぞろに
 鳴く鳥のこゝろを
 そぞろにや花とほふあり
 まさしくつらきまじりの
 若うしむものゆかりの
 まじりたるものもふり
 是所のこゝろねえ馬の
 あつたもののまじりの
 るんらんするものまじり
 月よりほのぼのの
 まじりたるものまじり
 やくそ物のまじり
 まじりのまじり

秋 白 敦 如 已 典 孝 敦 如 吐 已 秋

[illegible]

如已敷 明已 孝女前典叱

鴨のうねるくさきおぼしめ
 杉戸をきけり草花のしら
 拂いあふぬ枝をさるゝのまに
 まつたあはれも夕ぐしーも
 むかしあふとて昔よりえや
 まつそいつはちかきともあ
 りきんじりの糸のしら花
 糸のりぬくとて心持
 うらましむき玉の次へ
 きみやなほ草ひきのしら
 こころ飛翔くらげあめの袖
 しとのこころすれども
 花の色は柳のよのなか

白 秋 白
已 叱 如 敷 已 已 曲 孝

子にむすのちうつや
 母の所へんのしん
 あつさ日ちうのしん
 るつと約よふちう
 石ころあつさのしん
 子にむすのちうつや
 母の所へんのしん
 あつさ日ちうのしん
 るつと約よふちう
 石ころあつさのしん

敦 白 秋
典 已 吐 孝

[illegible]

回 欠
孝 叱

白 秋 已 十 四
 如 十 一
 曲 孝 教 已 叱
 白 叱

白 秋 已 十 四
 昌 叱 十 三
 雅 敦 九
 心 前 十 二
 慶 典 八
 俊 存 九

通 如
 紹 忠
 一 十

常坐和歌

二
落桑浮水

三つ本一のついで

道燈

池水

あはれもふしのうた

義性

うきよのふ

神在月王成王

雅敦

三才圖會

ふくまのふくま

時通

江戸の風

池田のこゝろ

已

一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

しぬくぞう

昌

今更にふしよのなまふらん

そのち
せきし
らる
本恩の

仁翁

おらふ池のつゝみ

清ひのち

道如

乙
 子
 地
 の
 あ

2

何人

白 壽恩 秋 紹巴 日新中 昌吐 郭中 心前 永孝 萬如 紹清

梅松 白 秋 彩 日 白 新
恩 巴 吐 中 中 中 中

白 新 白 日 秋
巴 比 巴 如 前 存 吐 中 巴 恩

秋 日 中 市 恩 法 吐 巴 如 日 中 孝 市 秋

秋 白 郭 如 清 前 巴 忍 白

白
 吐如 日新 巴恩 吐如 白
 中中

巴吐 秋 孝 沽 市 巴 中 吐 秋 急 新 白 巴

在ゆゝのわが流ありや
 依もぬこころの空
 たりわがのこころの空
 言のれいふの袖の泣き
 白

聖護院

白 十句 道澄

大覚寺

秋 九句 尊性

日野

紹巴 十二 輝資廿九

鳥丸

昌比 十一 光宣廿五

此一巻古懐紙官腎内田之勝所藏也壽恩者之勝之但
 月田黙庵 文化十癸酉初春書寫

高倉

心前 十 永孝朝臣 七

魚如

紹清 八

梅松

一七

右懐紙 心前之續也鳥子下續全銀泥

初表

山月楼 禁方雨

裏

桃柳

二表

壯若

裏

芦水葵

三表

萩蘭

裏

萩薄

名表

寒芦

裏

水仙

天正十四年正月廿日
於大津 夏之極湯無

白
 位よりのかみにも春は海邊に
 舟の影をのぞく松
 玄音
 秋
 紹巴
 頼隆
 昌吐
 金宗
 玄以

秋 松白 友由友心
以全吐隆 巴方 登已盛創

松 秋 白松
吐以令 隱者巴 由華安

松 白 林
巴 簞 吐 以 方 前 瓊 由 巴 前

松 白 秋 松
 金 巴 由 陸 名 市 吐 以 金

牛の車とてなまふてなり
 友とて呼ぶのふのほろや
 位とてきまのわめ
 二匹のていふあはれん
 小栗鹿の月とてむす
 村の里やふゆふ
 りふ又とてなまふてなり
 うはとていふてなり

叱 全 以 已 亦 有 感 由 叱

[illegible]

由 以 吐 巴 奇

秋招白

白 松 玄 紹 秋 賴 昌
九句 十三句 八 九 八 七 九

全宗
玄以
心前
友感
由已
友益

一七六八七

何
咄

豐臣大岡
才公

閑しう花もさるのまゝ
雲入神をくすむ山こそ
此の物のもちふもよみて
好海の水よりあつ末
河の系れぬや風と我らん
月。あはる芳のすましん
空のこころのなほそ
らへようきもこのようぞう
山々心もわくのしみぬん
あはれりけり

白聖護院道陰
昌吐
玄旨師
秋本名尊性
人前
錦中隠
玄旨師
金宗海

11

[illegible]

日中 白 秋 相
中 以 巴 吐 字 号 吐 巴

月 中 字 吐 已 巴 亦 以 各 已 吐

勢に輪の目にまゝ
 浮世をひきまゝ山を
 とのつて氏とてさや
 ろれやとてうし袖
 植つて四つのおも
 里のうしつて
 かのもろおの下
 へれよとて起
 けのうしつて
 志賀の浦
 白

以 吐 ち 巴 已 以

以者吐 矣 巴巴 以

松 十二句
紹巴法橋
昌叱
白 九句
玄音法印
秋 九句
心前
日野中納言 七
九

玄以以印
金宗以印
由已
友益

一八七九

天正十九年五月廿七

いさる無り

何色

夕まはるやうな水に
まゝ本の方の松風の吹
越のうす山は月の柳
まゝいしむ神のまゝ
まゝぬまじいもの
うす水と田中の里ま
まゝいしむやうな村
まゝいしむやうな村
まゝいしむやうな村

主何
まゝ
長
巴
信
言
魚
な
成
融
海
園

与世同生如高已從方何仙也

如方益壽也巳此方明已仍

何蓋亦已從何水也蓋成已者何

已者從象量仍也成者已如者高

也已反象何成從高已方蓋何高

高者已得此友者已高者已得

也 還 已 何 方 友 如 還 高 方 友 也 何

友堂融成淨圓如仙也

文長十年四月廿一日

薄何

ワッ紫ももろの色みも梢
夏の日ゆふふ屋のわれ山
解のえ軒溜まりの河
戸月ももろの秋の初風
月井の流ひす川さみのる
舟やう霧のひさしうらん
しづのうらひうめうらん
川うらふあうのふのうで
あひさうのふのふのふ
荒ふ田の柳やうのうらん

玄 信 昌 底 忠 玄 徳 因 交 富 在
仍 吉 琢 相 能 仲 れ 純 生 英

文化十年仲夏と云
〇

常吉仍取仲安紙札仍莫取

仍札取錄吉仍出安純付札取錄吉

けしきよき波の浦の
舟にこころもけしき
あやうきこころの
福まや月うきと照らん
こころのゆき水に流る
こころの軒の下に
しきもこころの
初まきこころの
けしきこころの
こころの
志まきこころの
後のまきこころの
くまきこころの
谷水こころの

けしきよき波の浦の
舟にこころもけしき
あやうきこころの
福まや月うきと照らん
こころのゆき水に流る
こころの軒の下に
しきもこころの
初まきこころの
けしきこころの
けしきこころの
志まきこころの
後のまきこころの
くまきこころの
谷水こころの

けしきよき波の浦の
舟にこころもけしき
あやうきこころの
福まや月うきと照らん
こころのゆき水に流る
こころの軒の下に
しきもこころの
初まきこころの
けしきこころの
けしきこころの
志まきこころの
後のまきこころの
くまきこころの
谷水こころの

けしきよき波の浦の
舟にこころもけしき
あやうきこころの
福まや月うきと照らん
こころのゆき水に流る
こころの軒の下に
しきもこころの
初まきこころの
けしきこころの
けしきこころの
志まきこころの
後のまきこころの
くまきこころの
谷水こころの

松浦のおきれおやのうく
 海京もなもののとうよあて
 あつらんやきとの筆
 限あれいおきもくむう
 うきうつせもてけむる

吉琢英仲お

玄仍	信吉	昌琢	座相	忠能	玄仲	能れ
十二	九	十二	九	八	十	九
月吉	玄純	宗玄	直英	玄常		
七	九	七	六	一		

連哥師玄仍
 百韻一巻
 百韻一巻
 百韻一巻

文化九年十月中旬書寫

昌成

右懷紙鳥子下
 初表
 二表
 三表
 名表

此是印懷紙表四丁
 初表二表也
 三表長ふり表也



慶長十九年九月十七日

夕何

秋の夜は
あふる月
あふる山
あふる川
あふる水
あふる流
あふるま
あふるや
あふるつ
あふるん
あふる袖
あふるお
あふるり
あふる日

玄仲
道仲
祐心
知成
吉利
多盛
言當
友言

如之當言利善人成仲乃信吉安如
如之當言利善人成仲乃信久信之

仲成之信云以警當成公厚利信仲

けり久い斗う家の重
 年をうけにけりるを
 物うきうきうと起て
 うけ玉のうきうに
 うきうきうのうきうに
 うきうきうのうきうに
 うきうきうのうきうに
 うきうきうのうきうに
 うきうきうのうきうに
 年言仲善如及當ん

玄仲 十二 家風 八 吉信 七
 道仲 十一 言當 九 信久 一
 祐心 十一 友言 八
 知成 九 如心 九
 吉利 八 安之 七

右慶長十九年九月十七日連致古懷紙
 里村玄仲筆請一紙し刻書了
 玄仲未原玄碩不藏
 乙巳十一年二月四日

料紙鳥子下緒
 初表 表 表
 二表 表 表
 三表 表 表
 名表 表 表

大日本史 卷之三十三
元和二年二月二十一日
大坂御陣

長廿年正月元日

大坂御陣 湯和勝 後 大坂無事

何人

蜂須賀阿保寺

山とてお

うすむやむー 西の海

至鎮朝臣

ういまの軒のうらな 稲田の島 祐心

蝶もも 唐きか 面は 柱に 刻

中れ くれし も ずし かつ け

ま くら くら や くら くら くら

ま くら くら や くら くら くら

谷の くら くら も 月の ま くら

空の ま くら 照 くら くら くら

、 祐心

慶長廿年正月元日

大坂御陣 湯和晴久侯が大阪無事

何人

蜂頭笑阿保寺

至鎮朝臣

山とてお すすむやむー 西の海

稲田の御家

ふいにまの軒のうらな
蝶もも居まかぬけに
中れんしもすつ
まゝとるゝあやう
まゝとるゝあやう
谷のうらな月
空のうらな月

法、法、法、法、
 人、人、人、人、人

、 珙 、 珙 、 珙 、 珙

、 𠂇 、 𠂇 、 𠂇 、 𠂇

銘、銘、銘、銘、銘
 〃、〃、〃、〃、〃

站 站 站 站
 人 人 人 人

銘、銘、銘、銘、
 、人、人、人、人

西のやまは、さう昇殿
わう、位や、さうの程
深さ、さうな、さうな、
おま、さうな、秋の葉、
山人の、つぎ、秋、
さう、さう、さう、
さう、さう、さう、
秋の、さう、さう、

は、は、は、
ん、ん、ん

至鎮朝長 中

祐心 中

右百類友原行盛所蔵、一、年、さう、さう、
年、さう、さう、

至望道、さう、鎌軒、追福

懷舊

無如

人の、さう、さう、
消、さう、さう、
只、さう、さう、
お、さう、さう、
月、さう、さう、
さ、さう、さう、
さ、さう、さう、
本、さう、さう、
け、さう、さう、
さ、さう、さう、

二
付くもさへ向ふるの
新れり里も隣と求む
恨したる心のおも
えくせんのおも
末よふいふも
時しるもよ
月夜ふも
くもさへ向ふるの
園山もさへ向ふるの
あはれもさへ向ふるの
河もさへ向ふるの
神もさへ向ふるの
時えりもさへ向ふるの

いふもさへ向ふるの
甘あもさへ向ふるの
思ふもさへ向ふるの
風もさへ向ふるの
夕もさへ向ふるの
いふもさへ向ふるの
一列もさへ向ふるの
そもさへ向ふるの
櫻もさへ向ふるの
さもさへ向ふるの
松もさへ向ふるの
さもさへ向ふるの
さもさへ向ふるの

つり馬子の尻を
里やうかしの境にめん
きとらうきうたむ
宇治のふる村莊の色
もあめ月の下
風や赤いおじさ
ひくともゆきゆくまは
啼のやうな
あやのうしろ
あやうきあるき
あやうけの山ねみ
まのわもほろのわ
そあめうめう
何れの花をう

出てゐる人
 小田のつらつらの
 稲妻や
 月
 一
 清
 づ
 城
 文
 人
 ね
 子
 母

起洲より望む
 竹の葉やまきよき
 空のしほの秋風の
 第里の清たつ川衣
 中へもあまのめと
 奥ふもいふはなる
 白けあやの夢や
 教も入りの末は
 風もはらけ松の
 立ふみしは花の
 まる初陽の川
 ちあふしは梅の
 ちあふしは梅の
 ちあふしは梅の

[illegible]

崩と云ふ所ねの水の浅るや
わづらふ末もさう青柳
の葉のみの花のえりき胡を
西よりほやねるらん

常州真武城王真武右衛門尉氏幹
入道言碑軒道無也永祿天正之際
武家

猪苗代孟如独吟百韻以温古堂藏今言寫畢
文化十年臘月既望

右者阪昌成自筆本也

昭和九曆師走九廿三日北田氏差書入札之折落札子

